



第9回

阿蘇市
読書感想文コンクール

今年度も、数多くのすぐれた作品が寄せられた読書感想文コンクール。全74点の中から見事市長賞を受賞された3名の作品を紹介します。



《市長賞受賞者》

- 泊 優太さん (阿蘇小6年)
- 菊池真菜さん (阿蘇中3年)
- 益田久己さん (跡ヶ瀬)



「農家のファール」。この言葉が気に入り、「ぼくは農家のファールだ」という本を手に取りました。ぼくは虫

が好きなので、「農家のファール」とは何なのか、だれがどんなことをしたのかを知りたいと思いました。

この本には、石川さんという人がなるべく農薬を使わずに、農業をしていることが書かれています。石川さんは、温室栽培で野菜を育てていましたが、害虫が住みやすくなり、寒い時期でも害虫が平気で作物をあらすようになって、作物ができなくなってしまうた。それでも石川さんは、あまり農薬を使いたくないので、「虫を虫でやっつけると」という方法を試すことにしました。

石川さんはたくさんのお虫をもらい、いくつもの方法を試していくことにしました。まず「オンシツコナジラミ」というとても小さな寄生バチでやっつける方法を見つけました。次は、「アブラムシ」を「コレマンアブラバチ」や「クサカゲロウ」の幼虫でやっつける方法も見つけました。これは、天敵の虫を使っていろいろな害虫をやっつける方法です。このことは、この本を読んで特に心に残ったことの一つです。ぼくだったら一つ見つけたら、いろいろと試したりしないと思います。だからいろいろな方法を試して、よい方法を見つけ出した石川さんはすごいと思います。

石川さんの工夫は天敵の虫を使うことだけではありませんでした。花粉を運んでもらうこともしました。トマトの受粉をさせるために、「マルハナバチ」というハチをもらいました。それまで石川さんは手で受粉をさせていましたが、ハチはせっせと花粉を運んでくれました。とてもすごいスピードで運ぶこともできます。また、人間だといくら気を付けたつもりでも見落とすしてしまう花があるけど「マルハナバチ」にはそのような失敗がありません。しかも、「マルハナバチ」が受粉させたトマトは、実のしまったおいしいトマ

トに成長したそうです。人間の手でするよりも速く正確に、おいしくできるこの方法はとてもすばらしいと思います。

もちろん、すばらしい方法の発見だけでなく、多くの失敗もありました。しかし、石川さんは努力を続けました。ある日のこと、石川さんが使っている害虫の天敵を日本に輸出しているオランダの人が、日本でもっと天敵を売るにはどうしたらよいか、天敵はどのように利用されているのかを研究するために訪ねてきました。

オランダは昔、農薬を使って農業をしていた国でしたが、今では虫をたくさん利用していて、「虫の国」と言われるほどになっているそうです。石川さんは「チャンスだ。」と思いました。オランダのやり方を教えてもらえば、すぐに失敗の原因がわかると思っただけです。石川さんはオランダの人の説明をうけるたびに、一生けん命メモをとったり、疑問に思っていることを質問したりしてみました。しかし、なんでも知っている専門家でもきちんと教えてはくれませんでした。なぜなら、日本とオランダでは、気候や温室の広さなど異なる部分が多すぎたからです。だから、かんとんに質問に対する答えを出すことができなかつたので

す。そして結局、原因がわからないまま終わってしまったのです。

それでも石川さんはあきらめません。天敵を温室に入れる月を変えるところを試してみました。それからずっと観察をしたのです。そして、とうとう観察の結果が出ました。それは、えさになる害虫がどんな状態かを知ることができるとして働かせることができるということでした。つまり、何もしないでいて、温室の中に放せばずっと働いてくれるということではないことが分かったのです。そこで害虫の様子に合わせて天敵の準備をして利用してみると、効果があつたのです。初めて天敵に出会ってから丸四年、石川さんはついに天敵を使いこなしたのです。

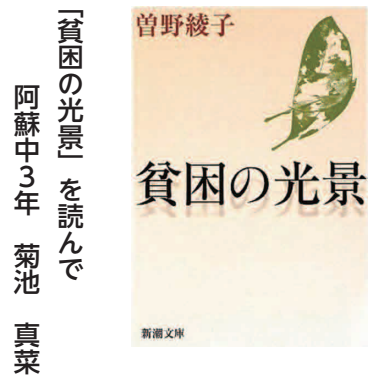
ぼくはこの本を読んで、虫を利用して農業ができることがとてもすばらしいことだと思いました。農薬を使うと、害虫以外の昆虫も死んでしまうし、自然や作物、人の体にもえいきょうがあるからです。

ぼくが住んでいる阿蘇は、今現在「世界農業遺産」に選ばれています。阿蘇の自然をうまく活かして守ってきたからこそ選ばれたのです。とてもうれしいことですが、これからもすばらしい環境を守り続けることは大変なことだ

と思います。石川さんのような努力を積み重ね、自然環境を利用した農業の方法がもっともっと増えて、すべての農家にいきわたり、本当の意味での「自然を使った農業」にしていけたらいいなあと 생각합니다。

《審査員選評》

読んだ動機から始まり、後半に阿蘇の世界遺産のことや、阿蘇の自然環境を利用した農業のことにまで考えを及ぼし、文章の構成もしっかりしています。主人公石川さんの失敗と成功への共感や感動が、読みの深まりとともに、うまく表現されており、筆者の強い思いが伝わりました。



「貧困の光景」を読んで
阿蘇中3年 菊池 真菜

よく学校で、ワクチンのための募金を行っていたり、テレビ番組で発展途上国の現状を放映していたりする。

でもそれは形だけであって、本当の貧困の光景を私達は知ることが出来ない。だからこの本を読んで、今私達の知らない場所何が起きているのか、現実のことを知ってほしい。

この本は、筆者である曾野綾子さんが実際にアジアやアフリカなどの発展途上国を訪れ、その場所で見えた貧困の光景や、そこから筆者が私たち日本人に伝えたいメッセージを書いた作品である。

まず、この作品を読んで衝撃を受けたことは、食べ物やきれいな水、生活するお金もなく、明日死んでもおかしくない状況にある人々が必死に生きようと頑張っているということである。

そして私たち日本人の生活がどれだけ豊かで恵まれているかをもう一度考えなければならぬと思った。普段の生活の中で、ご飯をお腹いっぱい食べることに、学校に通うこと、きれいな水を飲むこと、それらを私たちは当たり前前だと感じている。私も同じである。だが、そんな私たちの生活は世界の中でも恵まれているのだということを感じて改めて実感した。

そして、私たちには自覚しなければならぬことがある。どこかでひもじい思いをしている人がいる時に、日本では見た目が悪い、売れ残ったからとせっかくの食料を捨ててしまうことがある。それがどれだけもったいないことか、一人一人がしっかり意識する必要がある。私自身も、母が作ってくれた料理をお腹がいっぱいだからと残してしまつたことがある。これらをよく理解し作品を読むことでより多くの発見があり、学ぶことが出来た。

最初に述べた通り、作品には筆者が見た様々な貧困の光景が描かれている。多くの場面で貧しい家族や親を亡くした子ども、親に捨てられた子ども達と出会う。そこで筆者はアメを子どもに渡す。だが子ども達はお菓子を知らないから紙のはがし方を知らない。さらにアメを口に入れた子どもの中に

は途中で出して取っておき、兄弟に与えようとする者もいた。またある日、ピクニックに出かけた筆者は子ども達に弁当をあげた。その時にも、ほとんどの子ども達はふたを閉じて家に持って帰り、家族で分け合って食べようとした。この子ども達は本当に食べ物に困っているだろうし、空腹に違いない。普通に考えればもらった瞬間に食べ、空腹を満たそうとしてもおかしくない。それでも自分の気持ちをおさえて家族のもとへと急ぐ。そんな場面が多かった。私だったら自分も空腹をどうにかして満たそうと必死に食らいつくだろう。私はこの場面から、家族への愛情や深い絆を感じた。さらに他の場面では、食べ物はない、家もボロボロ、そんな生活の中でお互いが生きていくために親は子供のため、家族のために懸命に働く。その姿を見て、子ども達も家族のためにと朝から晩まで働くのである。中には子どものために思い、親元から離れた場所で生活させる場合もある。ここからどんな状況であつても心から互いのことを考えている様子が伝わってきた。

に伝えたかったのだと思う。そしてもう一つ、読み進めるうちに気付いたことがある。それは日本人のその生活の豊かさによって、必死に生きることにしているの考えが軽い人が多いということだ。例えば、病気について考えたとする。日本人は自分にお金がかなくても自分の病気は治療されるのが当然の権利だと考えている。また、福祉制度などを利用して、少ない負担で治療することが出来る。これに対して、アフリカなどの発展途上国では、お金がなければ病院にも診せることが出来ず、薬も買えないと考えるのである。福祉制度も整備されていない国が多く個人にかかる負担は大きい。筆者はどちらが「現世の理」なのか考えるべきだと投げかけている。生きることが保障されるかわりに死の存在を忘れて生きていくのと、常に死と隣り合わせの生活を、生きるために必死に努力する。もちろん安全に生きられる方も大事だが、死を忘れたが故に生きるために努力するということを私達は忘れてはいないだろうか。

知って欲しい。そして、私達が当たり前だと思っている生活は当たり前ではなく、陰で支えてくれる人が多くいるということ忘れてはならない。私はそう強く思う。

《審査員選評》

読んだことと、考えたことが筋立ててうまくまとまっており、感想の引出し方が上手です。発展途上国の貧困の問題点と、自分の日常とを照らし合わせながら読んでいくところに、よい感想が生まれるのだと思います。



百田尚樹さんの「永遠の0」を読んで
跡ヶ瀬 益田 久己

真夏の空はあくまでも高い。その青空の中腹を、真綿をちぎったような雲が西から東へと流れて行く。何気なく見上げていた俺の耳に異様な爆音が飛び込んできた。よく見ると流れる雲のはるか上空をB29爆撃機の大編隊を中心にP51、グラマン等の戦闘機が取り巻き護衛しながら飛んでいる。

俺は何が夢を見ているような錯覚の中で、ただ呆然と見上げていた。

やがて空襲警報のサイレンが鳴り響き、村人たちは蜘蛛の子を散らすように防空壕の中へ逃げ込んでいく。それから何分たつただろうか。遠い地鳴りのような振動が不気味に伝わってきた。

そんな出来事が何日続いた後、八月十五日のあの「玉音放送」である。我々は、いきなり谷底へ突き落とされた思いがした。

まだ鼻たれ小僧時代の思い出がある。同級生の男の子が二十数名いた。その中で海軍飛行予科練習生に憧れていた者が四人いた。俺もその中の一人であつたが、何分にも当時の俺は親譲りのちびっこで寸足らず、担任の先生は「おまえは軍人よりも、師範学校へ行き、教育者になれ。」と何回か薦めてくださった。

しかし、俺の信念は変わらなかつた。男兄弟が五人もいる我が家にとつて、一人ぐらゐの海の藻屑と消え去っても何の不都合も生ずることはない。

同級生の三人がこの予科練に志願し

て、二十人に一人と云う難関を突破し三人とも合格し招集された。残された俺は悲しみの中で背を伸ばすようなろんな努力を続けた。ちょうど成長期に入っていたのかもしれないが、年間4cm程しか伸びていなかった身長が一年後にはなんと12cm近く伸びていた。

俺は小躍りして予科練を受験した。宮地の試験場で三百人近い受験者の中からトップに近い成績で合格し、鹿屋の二次試験も無事合格。あとは採用通知を待つだけとなった。

しかし、いくら待っても召集令状は来なかった。そうこうする内に、あの八月十五日を迎えたのである。日本軍は連合軍に降伏し軍隊は解体され、戦争首謀者は戦争犯罪人として拘束され、それまで護国の英雄とされていた陸・海・空の若者どもは哀れな姿で故郷へ帰って来た。

帰って来ることの出来た者はまだ幸運な方で、この「永遠の0」に出てくるように、目的を達することなく海や山で死んでいった若者が如何に多かったことか。

しかし、あのどん底から六十有余年、日本は世界中が驚くほどの経済大国に成長した。政治家、実業家の先見の明、さらに国民の前向きな努力の結晶が今日の繁栄をもたらしたものと思う。

だが、何となく成長が止まったような停滞感の中で、アベノミクスの打ち出す政策は株価を急上昇させ、輸出も雇用も次第に伸びつつある。一気に上昇気流に乗ったような感じはするが、TPP参加を表明する総理、参加することによって生ずるメリットのある業種とデメリットのリスクを背負う業種は必ず出てくると思われる。総理は不利な品目は交渉から除外する、と息巻くが、世界経済の流れの中でかかる得手勝手な言い分が果たして通用するのだろうか。

更に、憲法九六条改正を叫び、その先にある大きなのは憲法九条に手を付け、国防軍によって日本の将来を守り抜くという目論見。

特攻機の爆音が今なお耳底に残る「永遠の0」の世界を体験した我々にとつて、過ぎ去っていく時の流れとともに、忘れ去られようとしている途方もない悲惨な時空を、簡単に乗り越え結論を出すことはなかなかできない。

ふと思った。今なお内紛を続ける中東、アフリカ他、いくつかの国々。五十年後、百年後の地球はどう変わっているのだろうか？

緩やかな光の放物線の彼方には、笑顔の絶えない平和な地球統一国家になっっているだろうか、それともSF小

説に出てくる宇宙戦争の真つただ中、地球は単なる宇宙基地の一つでしかないのか、全く我々には不明である。

だが、心から思うことはこの「永遠の0」が百田尚樹さんの単なるフィクション小説であって欲しい。希望に満ちて頑張っている現代の若者を、あの「永遠の0」の世界へ再び引きずり込まないでほしい。

願うことはただ一つ、希望みなぎる若者を真ん中に力強く歩き続ける平和な社会でありたい。

必ず生きて帰ると妻に誓って征つた主人公の宮部少尉、幾多の部下と同僚を失い、僚機のほとんどは海の彼方へ埋し去り、最後は生きて帰ることを自ら許せなかった主人公の心根が俺には解る。痛いほど解る。

まるで地獄の火の海のような集中砲火の中をかくぐり、愛機零戦とともに真つ逆さまに敵艦へ突っ込んでいった。

エピソードで米艦の士官が叫ぶ。「彼こそエースだ。敵ながら敬愛すべきサムライだ。」

艦長を始め、艦隊員が居並び甲砲の鳴り響く白煙の中、妻子の写真を胸に白布で巻かれた宮部少尉の遺体は真つ青な海の底へ深く、深く沈んでいった。押しつぶされそうな重圧の中で頬は

講評

《審査員選評》

こけ、目だけが異様に光る髻顔を俺は力いっぱい抱きしめてやりたい。そんな衝動にかられながら、万感の想いを込めて主人公に最後の別れを告げる。

何よりも体験に基づく平和への希求は胸を打ちます。益田さんの戦争と平和への強い思いが説得力のある感想文になっており、文章も整ったものになっています。

ご入賞の皆さんおめでとうございます。

阿蘇市としてのコンクールも、9回を重ね、内容的にも随分と向上しているように感じます。良い感想文を書くには、第一に良い本を読むことです。そのためには日ごろから読書の習慣がつくように、そうして心から感動する本に出会えるように、沢山の本を読むことです。

各学校や、それぞれの家庭で、ご指導、ご助言を頂きご協力くださいました方々に厚く御礼申し上げます。

阿蘇市読書感想文コンクール審査委員長 田尻明子
審査委員 麦田雅弘 宮本誠一 井上利之 井口法子